

HARP LIFE

10

2019

ハープと皆様を繋げる
オンリー・ハープなフリーペーパー



EIGHTH
ISSUE
Vol.8

DONEGAL

My Favorite in Harp's song

ハープ 私の1曲

第4回 ハープ奏者 / 講師 田中 淳子 『モーツァルト：フルート&ハープの為の協奏曲第2楽章』

柔らかい物腰で微笑みが絶えない田中さんと接していると、多様性とか積極性という言葉とは無縁のように思えることがある。しかし銀座十字屋でハープ講師を20年以上務めており、クラシックは元よりポップスやジャズまで幅広い演奏の場に出て、TVやレコーディングにも多数参加している。先の「ハープの日」ガラ・コンサートで、プロと共にステージに上がるアマチュアの出演者たちに総括的指導をしたのも、実は彼女だ。指揮を務めたフビウス・コンスタブルが、その統率力をして「マエストロ」と称賛を惜しまなかった。八面六臂の活躍の源はどこにあるのか。

意外なことだが、そんな彼女の「多様性」が実は後天的なものであるといったら、驚くかもしれない。「私は、ソロ演奏でバリバリやるまで技術が高いわけではなかったから…」という咬きの中に、その答えがあった。先に物故した巨匠ヨセフ・モルナールの直弟子のひとりであった彼女は、ある日師からこう切り出された。「あなたは、もっと幅広く音楽を身に付けなさい」と。今も多くの弟子たちが日本のハープ界を支えているところを見ると、モルナールという人物は慧眼の持ち主で、いわゆる適材適所を見定め、ハープという楽器の中で、その人がいかに活かされるかを見極められたのだと思う。その後田中さんは、即興という俊敏さが求められるジャズ演奏に飛び込まれたり、応用と即応性が求められるTVでの演奏に参加したり、そして求められている役割を正確にこなすことが要求されるオケやレコーディングの場など、“現場”という実学・実践の場で腕を磨いてきた。師匠は潜在能力を認めた上で、おそらく獅子が我が子を谷底に突き落とすような気持ちで、彼女の背中を押したのではない。

以前に、「ハープでお好きな曲は何ですか」と質問した際、彼女はアッセルマン「泉」とモーツァルト「フルート&ハープの為の協奏曲：第2楽章」を挙げた。そこで、彼女の現在の姿と実に幅広い音楽をハープで伝える姿勢とが、繋がったと思った。モーツァルトの1曲。巷間、今ほど演奏技術が世界的にも発達していなかった当時のハープにモーツァルトは興味がなく、依頼によって仕方なくこの曲を作ったと伝えられる。さすが天才。後にも先にも、この1曲しか彼はハープ曲を遺していない。だがその1曲が悪魔的に美しく、シンプルながら奥が深く、なぜ知っていたのかと思うほど、呪わしいくらいフルートとの相性がいい。これは邪推に過ぎないけれども、彼女はこの曲の美しいハープの旋律に魅せられたというより、むしろハープに+1の要素や楽器が加味されたら、ハープはさらに魅力的になる事を体感したのではないだろうか。それは師匠が込めた多様な音楽性を身に付けてという願いの反映と、色々な音楽に接する上での指標にもなった。真面目な田中さんは、人生賭けて師匠から与えられた課題を、今も黙々とこなしているのかも知れない。



The Last Chorus

●Harp Lifeでは、ハープにまつわるコンサートやイベントの協賛/協力を行っております。該当案件は、事前PRとして誌面もしくはWEBのHarp Lifeで告知する他、事後のレポートを掲載するケースもございます。但し、実施日3ヶ月を切った情報に関しては、扱いかねますので予めご了承ください。お問い合わせ→ harplife@ginzajujiya.com

●来る12月8日を目途に、銀座十字屋では中古ハープフェスティバルを開催予定とのこと。それに伴い、現在ハープの買い取りも強化中なので、この期にぜひ査定してみても? お問い合わせ=銀座十字屋ハープセンター ☎03-5635-3380(平日10:00-17:00)

●本誌と姉妹メディアであるハープライフWEBが好評展開中です。随時コンテンツも更新されておりますので、ぜひアクセスしてみてくださいね。



EVENT SQUARE

スイベント
スクエア

注目!

11/16 11/17 国際ハープフェスティバル2019 草加市メインコンサート
イオン・ジョーンズ、シヤンタル・マチュー、篠崎史子、井上久美子、篠崎和子ほか(ハープ)、錦織健(特別ゲスト)、徳永二男(特別ゲスト)

10/5 グザヴィエ・ドゥ・メストレ
千葉・浦安音楽ホール

10/8 グザヴィエ・ドゥ・メストレ(ハープ)&ルセロ・テナ(カスターネット)
東京・紀尾井ホール

10/9 グザヴィエ・ドゥ・メストレ(ハープ)&ルセロ・テナ(カスターネット)
愛知・豊田市コンサートホール

10/11 ロビン・ティチャーティ(指揮) ベルリン・ドイツ交響楽団
吉野直子(ハープ)高木綾子(フルート) 東京芸術劇場

Harp Day Week Report

8月2日「ハープの日」

WEEK グラフィティ

8月2日はハープの日。

今夏初めて制定された、いわばハーピストたちの旗日は、
当日8月2日を前後して日本各地で様々な催しが行われたようだ。
今回は、小誌が主催・協賛したイベントに関してレポートする。

Week Graffiti



エレクトリックハープライブ 単独即興

1日は、「エレクトリックハープライブ 単独即興／SANA E」。デルタ、レインボーなど、エレクトリックハープを駆使する先駆者SANA Eのクラブ・ギグだが、怪談やプリンセス・ストーリーなどを基軸に、SANA Eが即興で綴る音のタペストリーに、朗読や映像が絡んでくるといった趣向で、満員となった会場に進取の気象をアピール。エレクトリックハープの可能性、そして何よりハープを用いたライブにおける表現領域の多様性を押し出した、絶好のオープナーとなった。



▲8/1=SANA Eが、エレクトリックハープのデルタを携え登場。特に、「怪談」をモチーフに即興で任巻のソロ演奏を展開した場面は、刺激的だった。



翌2日は、「プレイ・ヴェル
ディ・ガラ・コンサート2019」。
ハープの日を祝う。であるなら
ば、誰もが参加でき、ハープと
いう楽器に出会えた喜びを
享受できるものであるべきだ
…という趣向で、本誌が主催
したイベントである。入場料は
1,000円、プロとアマが同じス
テージに立ってハープを演奏
する、国内のお祝いでは終わら
せず、海外にも日本における
ハープの実力をアピールでき
る場にする。
そんな主張に賛同頂いた
ハープ愛好家の皆さんが、当
日300名定員の会場を満席
にしてくれた。ステージに載る
ギリギリの30台のハープが、
一斉に奏でられる様子は壮



GALA CONCERT

プレイ・ヴェルディ・ガラ・コンサート2019

観の一言。改めてハープの
美を確認できたといった声を
多く頂戴した。音楽監督に就
いたファビウス・コンスタブル
も、改めて日本のハープ熱が
徐々に高まっていることを肌
で感じ取ったようで、ステージ
最後について「来年もお会いし
ましょう」と宣言していた。やり
ましょうよ。皆さんがあんなにも
喜んでくれるのならば。



▲8/2=ファビウス・コンスタブル指揮の
もと、プロとアマが同時に30名ステー
ジに上がり、「乾杯の歌」を演奏。本誌は、熱
の入ったリハーサルの模様もキャッチ
した。

そのファビウスが、5日後
に挑んだのが、「ファビウス・
コンスタブル・スペシャル・コ
ンサート・イン仙川」だ。いち
ハープストに戻って、ファビウ
スが辿った音楽的変遷やレ
バーハープの粋を演奏する
というコンサートだった。故
郷イタリアの古謡、アイリッ
シュ民謡、そして第二の故
郷と言って憚らない日本の
印象を、レバーハープ一台
で表現してみせた。親しみ
やすい選曲、予想外の渋い
ボーカルも披露し、会場を虜
にした。レバーだけで2時間
持つのかという事前の懸
念。ファビウスは、K点を楽々
と超えてみせた。



Fabius Constable

スペシャル・コンサート・イン仙川

▶8/7=ファビウスが、いちハープ奏者に戻り、東京「せんがわ劇場」
で一夜限りのソロ演奏。自らの音楽的出自であるイタリア〜アイル
ランド〜日本の歌を、ハープで謳い上げた。(写真協力/石井宏和)



最後は、9日の「親子のためのハープフェスティバル」も盛
況だった。ハープに限らず、クラシックのコンサートは、どうし
ても長時間じっとしていられない子供と、そんな子供に情操
教育の一環でよい音楽に触れてほしいという親心が、敷居
の高さに難渋するポイントだ。そんな状況に、ハープの側か
ら胸襟を開いて音楽に慣れ親しんでもらおうというコンセ
プトである。銀座十字屋ハープ・カルテットを筆頭に、中村愛&
池山由香(アルパ)、金谷歩実&飯島幸子(フルート)、増田
太郎(ヴァイオリン)といった日本ハープ界を代表する実力
派メンバーとその共演者たちがそろって、しかも無料で鑑
賞できるというのが、なんとも太っ腹。ディズニーやジブリの
音楽だけではなく、ピアソラの選曲もありで、「どうせ子供向
け」という予想を覆し、むしろ参加できなかった皆さんには

「いやいや、いいもの聴き逃しましたわ」と伝えたくなるほどの
クオリティ。ハープに初めて触れた親子にも、きっと素晴らしい
印象を心に焼き付けたのではないだろうか。

お盆前の暑い夏。開催時期としては、けては良好な季節
とは言い難い。しかし、それでも集まった方々は掛け値なし
のハープ愛好家だし、同好の士が友好を温める絶好の機
会になったろう。ステージで拍手喝采を浴びて輝くガラ
コンサート出演者たちの誇らしげな笑顔。親子で初めて指
弾用ハープに触れて感動しきりの表情。最後列でファビウス
に涙を流してエールをおくるご年配の婦人。エレクトリック
ハープの音に驚くハープ・ファン。そんな皆さんのことが忘れ
られない夏になった。

▼8/9=東京・日本橋で行われた「親子のためのハープフェスティ
バル」。終了後の出演者たちの舞台裏集合写真に、ステージの充足感
の余韻が感じられる。

HARP festival

親子のためのハープフェスティバル



Point of
PERFORMANCE

演奏のポイント

はじめは、上行・下行の指の交差をラクに。雑音のない、粒のそろった音階を弾くために、指の力をつけるのに役立ちます。次のページではフック(レバー)操作を、解説と写真を参考に、ためてみましょう。最後にそれを「J.S.バッハ/メヌエット」で応用します。目線は、弾いている弦と、フック(レバー)をいったりきたりするため、距離感に慣れるように。和声と関連づけて覚えると効果的です。

音階(はやい練習)

<58> <59> は、一つ一つの音を美しくひびかせて、ゆっくりくり返して練習します。♩ = 60で5回ひいて、次の1回は♩ = 60でというふうに、くり返してよく練習することがたいせつです。

<58> A

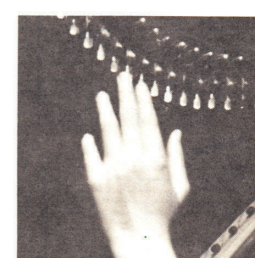
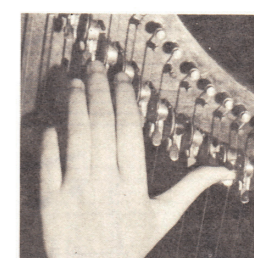
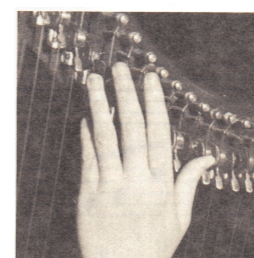
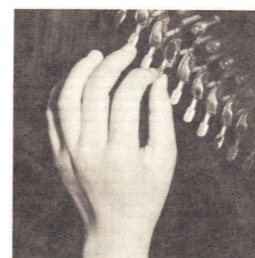
B

<59>

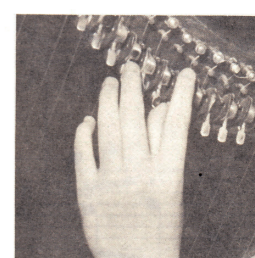
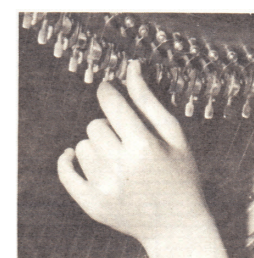
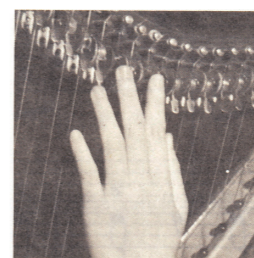
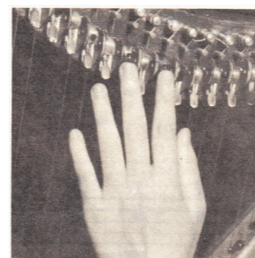
半音鉤の操作

アイリッシュ・ハープは、鉤が上下動になっているので、操作が迅速にできます。しかし、左手ではひきながら鉤を扱うことはできませんから、前もって操作の場所を決めておくため、譜面を通じて研究して書き込んでおきましょう。

- ① 上げ下げは正確に
- ② オクターブは第1指と第3または第4指で
- ③ 第1指の腹で二つの鉤を上げる
- ④ 第2指・第3指を使って下げる



- ⑤ 第2指と第3指で上げる
- ⑥ 第2指と第3指で下げる
- ⑦ 第1指で上げ第2指で下げる
- ⑧ 指を交差させて第1指で前の鉤を上げ、第2指で後方の鉤を下げる



注：鉤の扱いは自分でくふうしてよいのですが、鉤が音を立てないように正確に練習します。またアンサンブルで2台以上が同じパートを受け持つ時は、上げ下げの場所をそろえておくこともたいせつです。

<24>

メヌエット

Allegretto ♩ = 63

J. S. バッハ

季節の おすすめハープ

Vol.8

季節ごとに、毎号1台ずつ
銀座十字屋がおすすめする、
素敵なサルヴィハープ。
今回は「ディーヴァ」です。



薔薇の棘をもった美しき女王、という表現がふさわしいかも知れません。画期的なデザイン、モダンで風合いが良く、強度も申し分ない。特にプラチナ・バージョンの、微細なプラチナコアでまとめられた大胆で包み込むような形状は、今までのサルヴィハープとはどこか違う、大胆な未来を予感させます。

あのヴィクトリアとデビューは、ほぼ同時期でした。片や贅を極めた至高の芸術品。一方でディーヴァは、いぶし銀の魅力を秘めた、クールで機動性あるギア。両者はどこまでも対照的でした。共通項があるとすれば、いずれも未領域に踏み込んだハープということ。つまり、未だ弾きこなした人も、凄い楽器であることを実証した奏者はいなかったのです。

高さ186cm、幅100cm、重量39kg、響板の幅56cm、47弦、響板はフィエネメ峡谷のレッドスプリース。プラチナは、ダークブルーに仕上げ。

このハープの特徴をお伝えするにあたり、すでに弾いたプロの証言を収集すると、ディーヴァがとんでもないハープであることが見えてきます。「音の立ち上がりが早い」「一音一音が実にクリアに響く」「ビッグ・サウンド」「実力がそのまま出してしまう」「ライブに向いている」等々。有体に言えば、自信のある上級者向けで、弾き手を選ぶということでしょうか。少なくとも楽器が演奏を助けてくれることはなく、技量に応じて美しい響きが最大限引き出されるのでしょうか。実に厄介なハープですが、この「歌姫」の強烈な魅力に抗う術もないというのも、また事実なのです。

技量に
美しい響きが
最大限引き出される。

Diva

ディーヴァ

JUNSHI MURAKAMI

編集長インタビュー：村上淳志

グローバル・ヴィレッジを往く。

バスキングへ。蹉跎を感じながらも、
村上は勇気を出してダブリンで一步前へ出た。

確かに世界は狭くなった。インターネットの発達で、人はいとも簡単にヴァーチャル・リアリティを楽しめるようになった。しかしながら、それは必ずしもグローバルイズムとは直結しない。つまり、実際に体験するのと、体験した気になるのでは天と地ほどの差があるからだ。真の国際人とは、国外の人々からも、その活躍や行動を認められている人であり、存在意義を尊ばれている人だ。日本人ハープ奏者にも、そんなグローバル・ヴィレッジを往く男がいる。村上淳志だ。



アイルランドで村上はジロジロ見られたり、物珍しさから後を付けられたりもした。音楽学校でハープを教えていると聞き、そこへ通い出す。ダブリン郊外にハープ職人がいることが判り、楽器作りにも興味があったので彼に食らいつき知遇を得るようになる。その職人の父が、アイルッシュハープの歴史の本を書いており、工房にいないときはパブでその本を辞書片手に読み耽る毎日を送る。ある時、ハープフェスティバルが開催された際、行ってみたら近隣ではほとんど見ることがなかったハープ奏者が、アイルランド各地から100名く

らい集まっていた。村上が覚醒したのは、この頃だ。この時の感動や興奮を、村上は今も東京で開催する自己のハープフェスティバルで再現しようと試みている。

未知だからこそ自ら拓く

ケイト・ブッシュ、アイルランド、ハープ。落語の三題噺ではないが、このキーワードで未知の世界に飛び込んだのが、他ならぬ村上だ。洋楽ポップスでもどこか風変わりだったブッシュの音楽が好きで、いつか行ってみたい土地であったアイルランドを探るうち、当地の代表的な楽器であるハープに興味をもった。まだインターネットなど発達していない当時、魅力を体感するには「行ってみる」しかなかった。普通なら常識がモチベーションを抑制し、観光からは逸脱しない程度で、アイルッシュ音楽の表層をなめて終わるものだ。「誰もやってなかったから」と、その地に留まってハープ弾きになろうとまでは思わない。事実、当地

誰もやらないなら私がやる

村上に嫉妬してしまうのは、よくぞこれほどまで興味が持続する人生のテーマを、自ら切り拓いたという点だ。後に彼は、ダブリンの街でバスキング(路上演奏)に出る。アイルランドでバスキングはよくある光景で、街も路上演奏には寛容で、皆が音楽家の成長を共に応援する空気はあるという。一見簡単なことのようにだが、もしも東京の街なかで青い目の外国人が、三味

線を掻き鳴らしながら「津軽じょんがら節」を演奏していたら、皆さんはどう思うだろうか。奇異な光景に、まずはニヤニヤと冷笑を浴びせらるだろう。演奏する側は、相当なプレッシャーに苛まれる。だが、真っ当で心が入った演奏には、誰もケチをつける者はいない。村上と彼が奏でるハープの音色は、徐々に街の顔になってゆく。演奏が街に溶け込み、彼が街の一部になったからだ。意外なことだが、本場のアイルランドでは、ハープのバスキングは少なかったらしい。誰もやらないなら自分がやってみる…そんな村上の信条に、街もフィットしていたのかもしれない。憧れで飛び込んだアイルランドの地で、今では地元の生徒に、ハープを教えている。アイルッシュ音楽の演奏家たちにもその名を知られるようになり、仲間も増えた。そうした影響を、今度は故郷日本で広めようと、里帰りするたびにハープフェスティバルを開き、アイルッシュ音楽／ハープの啓蒙に努めている。本来、グローバルイズムとはこういうことを言うのではないか。ハープのグローバル・ヴィレッジでは、粹なことが起こる。とあるハープ奏者が、アイルッシュハープを学ぼうと、アイルランドにやってきた。ダブリンの街を歩くと、偶然バスキングしているハープ奏者がいた。しかも、彼が日本人であったことにひどく驚いた。思わず声をかけ、同じハープ奏者として交流が始まった。村上に声をかけたハープ奏者の名は、ファビウス・コンスタブルという。



▲今やすっかり街の顔に。演奏仲間や教え子も増えてきた。

